

巻頭言

質量分析とともに歩んだ人生

東京薬科大学 志田保夫

私が質量分析を始めて数年後の話題に鳥が魚に恋をして成就するかなんてことがあった。つまり液体を使う LC と高真空の MS の接続が可能か？という一種の思考である。GC との接続に困難を極めていた時代になんと無茶な！と思っていたが、現実のものとなり、しかも今はそれが主流となっている。1 分子の検出も不可能を可能にしていく現在の技術を目の当たりにして私は MS の世界での不可能は考えないことにした。

さて私が質量分析の仕事に就いたのは遙か昔で世の中の電気製品が真空管からトランジスタに変わろうとしていた時代、大型の電子計算機も登場して間もない時代であった。質量分析機の分解能、感度などは今と比較にならないが、分解能 300 からやっと 400 程度で質量 386 のコレステロールがなんとか測定できる程度の装置であった。スキャン時間は 1 回 1 分くらいでスペクトルは直接ペンレコーダーで記録する。試料にかける熱を調整しながら測定するのである。40 年経っても学生が急成長する訳でもなく、取り扱う試料に進歩は見られない。しかし装置の進歩には戸惑いを隠せない思いである。当時の新鮮な驚きであったのはその当時火星に質量分析機を運んで生命探査をしたことである。装置が小型化されやがて机の上にあって今のパソコンの

ようになるであろうと、密かに首を洗っていたころがあったが、装置は高価格、高性能に進歩し、そこが面白くてとうとう定年を迎える年までやり通してしまった。内気な性格は今でも変わっていないと思うが、仕事を通してこれも多くの友人知人を得ることができ、時には助け、また助けられてここまでやってこられたと思っている。今回の講演をお願いした方々も新旧取り混ぜて仕事の面で知り合った方であるが、快く引き受けていただいたことに感謝したい。質量分析の世界で生きて来て、他分野の方々の生活も知ることになったが、ここ数年専門外から手伝い要請があり多種多様の方々と会う機会が増え、対処に戸惑うことばかりである。交際術の下手さを通していまさら狭い世界に生きて来たことを恥じ入るばかりである。井戸の中において何も知らない方が幸せな生涯であったと思えるのかもしれないが、井戸から出たことでさらに充実した人生を送るきっかけを作ったのかもしれない。仕事を通して「義を見てせざるは勇なきなり」困っているなら助けようじゃないかと何でも相談に乗り、分け隔てなく義を貫き通して来たが、そんな信念が今の私を形成して来たのではないかと思っている。こんな生き方が良かったのか悪かったかは後の人の判断に任せよう。